

狂言師 善竹十郎さん

狂言は人間の弱さを面白おかしく表現する“立体落語!!”

6歳のときに初舞台に立った狂言師の善竹十郎さん。

70歳になった今でも朗々たる声はよく通り、舞の所作には寸分の隙もない。

大学で狂言を教えたり、海外で公演したりと、その活動は能舞台以外にも広がっている。

今回、お話をうかがって、能・狂言は、松と驚くほど深いつながりがあることも分かった。

それどころか狂言には、なんと「松脂」というタイトルの曲まであるのだった。

狂言師は筋トレいらず

「私、困ったことに内緒話ができないんです」

穏やかな笑みを浮かべながら、善竹十郎さんが言う。

別に地声が特別大きいわけではない。張りのある声が、数十メートル離れていてもはっきり聞き取れそうなほどよく通るのだ。実際、目の前で謡を聞くと、その迫力に圧倒される。特別な呼吸法や発声法があるわけではないというが、狂言の「かまえ」（基本の立ち姿）や型は、全身の筋肉を使わないとできないという。だから狂言師は日々の稽古や舞台上での演技だけで、全身の筋肉が十分鍛えられる。おかげで「狂言師は筋トレいらず」といわれるほどである。善竹さんの朗々たる声も流麗な所作も、やはり長年の修練の賜物ということだ。

現在、狂言には大蔵流と和泉流という2つの流派があり、善竹家は大和猿楽の狂言を伝える大蔵流の系譜。善竹さんの祖父の彌五郎は人間国宝にもなった名人で、もともとは茂山彌五郎という名だったが、1963年に金春流79世宗家・金春信高様から善竹の姓を与えられたのである。

「5歳の頃から父（善竹圭五郎）の稽古を受けるようになりました。6歳のとき、『靉猿』の子猿役で初舞台を踏みました。これは明確に記憶しています。父の稽古は厳しかったですね」

一言発するだけで 客の心をわしづかみ

狂言にも台本はある。だが、善竹さんは幼いころ、台本は一切与えられなかった。師匠と向き合って座り、師匠が言ったセリフを節やリズムを真似て繰り返す口伝が基本だったのだ。

「人にもよるでしょうが、やはり最初のうちは本を読んで覚えるより耳で覚えた方がいいようです。私は台本を見なくてもすぐに演じられる狂言が40～50曲はあります」

芸歴60年を超えるそんな善竹さんだが、自分の芸が完璧だと思ったことは一度もなく、「まだまだ修行中の身」と言ってはばかりない。狂言の場合、特に難しいのは「響きと間」だという。

狂言は能楽堂で行われることが多いが、ときには野外や大ホールで行われることもある。そういう場合、

どこまで声を響かせることができるかが、大きなポイントになる。もちろんそれは単に大きな声を出せばいいというものではない。

「一言発することで、お客様の心をぐっとつかまなければいけない。響かなければ、お客様の心はすぐ離れてしまいます」

と言って、善竹さんは「いろはにほへとちりぬるをわか」を、抑揚をつけて謡いだした。驚いたことに、「いろは」から「をわか」まで一息で謡うか、途中で音節を切るか、それだけのことで伝わり方が全然違ってくるのだ。

「切っけはいけないところで切ってしまうのは、息が浅くなっている証拠です。狂言師は常にクオリティの高い声を発しないといけません。私は風邪を引かないように気を付けていますし、暴飲暴食もしません。カラオケに誘われたらお供しますが、私自身は1曲も歌いません（笑）」

時間をかけ、 体や耳で悟るしかない

一方の「間」については、「間狂言が特に難しい」と言う。

能の曲目のときに狂言師が登場し



ぜんちく・じゅうろう 1944（昭和19）年、大阪市出身。早稲田大学政経学部卒業。祖父善竹彌五郎、父・圭五郎、大蔵流24世宗家故大蔵彌右衛門に師事。重要無形文化財総合指定保持者。（公社）能楽協会・（一社）日本能楽会会員。1983年芸術選奨文部大臣新人賞、1993年大阪文化祭賞受賞。2014年夏まで桐朋学園芸術短大で48年間、狂言を教えてきた。フランスのピーター・ブルック演劇教室での講師、オランダのユトレヒト大学、ルーマニアのブカレスト大学など演劇教室での講師などを務めたこともある。



この障をバタバタと前後させながら登場する。障に描かれている図柄は、海苔。乗馬の乗ると海苔、松脂=接着剤=のりとかけている。



善竹さん、ご自身で打った面。使っている素材は檜。うつむき加減で怒って見えたり、笑って見えたり表情が変わる。

て、ナレーターのようにストーリーを説明したりすることを「間狂言」というが、その語り方は曲目によって異なる。女性が主役の恋物語なら、ゆっくりとした調子で静かに語り、戦ものなら強い調子で、という具合だ。間狂言の出来によって会場全体の雰囲気まで違ってくるというから、役割重大だ。

「計ったように正確な間を取らないといけませんし、能の種類によって響きも変えなければなりません。そういう技は、何度も何度も繰り返して身に付けるしかありません」

今はビデオもテープレコーダーもある。国立能楽堂に行けば、誰でも能や狂言のビデオを見ることができる。けれども善竹さんは、そうした機械類を一切使わないという。「長い時間をかけて、体や耳で悟るしかない」と考えているからだ。

狂言に登場するのは、たいてい2〜3人。主役は「シテ」、脇役は「アド」と呼ばれる。もちろん舞台上に立つ役者だけでなく、バックコーラス役の「地謡」や、楽器を演奏する「囃子方」なども狂言には欠かせない存在だ。

「狂言の謡いだけでなく、能の謡いや舞も習いました。高校から大学までの間は、笛や小鼓などの稽古もしました。

狂言師が囃子方として楽器を演奏することはありませんが、やはり知っておく方がいいのです」

能舞台に松が描かれている理由

能と狂言はもともと「猿楽」から生まれたもので、いわば兄弟のような関係といえる。だから能と狂言はセットで演じられるのが本来の形とされる。俗に能は悲劇、狂言は喜劇ともいわれるが、実際にはハッピー

エンドの能もあるし、悲劇的な狂言もある。善竹さん自身は狂言を「立体落語」と言っている。

「思わず笑いを誘う面白さが狂言の真骨頂ですが、実は人間の弱さを表現しているところもあるのです。約束を破ったり、見栄を張ったり、嘘をついたり酔っぱらったり、人間にはさまざまな弱さがあります。そうした弱さも面白おかしく表現するのが、狂言なのです」

もともとと同じところから生まれているので、狂言も能舞台で演じられて



何事も「なるほど」が大事。完璧なんてありません。“stay young”です。

る。そしてこの舞台の背景には、必ず老松の絵が描かれている。もちろんこれには、理由がある。

能舞台の背景に描かれた松は「鏡板」と呼ばれている。古来、松は神仏が宿るとされており、神が天から降り立つときは松の木が依り代になるといわれている。常緑樹で寿命も長いことから、松はめでたいものともされている。

能・狂言は神事ともなっていて行われることが多く、神仏の前で芸を披露するという意味で舞台に松の木が

描かれているというわけだ。

松脂の精が登場する狂言も

さらに面白いことに狂言には「松脂」という曲もある。年頭の祝いとして松囃子の催しを開くと、松脂の精が現れるというなんとも奇想天外なストーリーだ。これが「松の精」なら能にもなりそうだが、「松脂の精」というところが、いかにも狂言らしいユーモアを感じさせる。しかも松脂の精は「やにやにやにや、松脂やにやァー」と言いながら舞台上に登場するというのだから、なんとも滑稽である。

実は善竹さん、この松脂の精の役を演じたこともある。このとき被る面を善竹さんは自分で制作している。古道具屋で購入した江戸時代のものと思われる馬具の障に自分で細工を施し、小道具として使っている。

「松脂の精は、弓の弦に使う松脂を力強く練って舞い納めます。武士の世の中がいつまでも栄えることを願っている曲と考えられます」

そう語る善竹さんは、古希を迎えた現在も年100回以上、舞台上に立つ。一方で大学や子ども向けのワークショップで狂言を教えたり、海外公演を行ったりもしている。イタリア

のコメディを狂言バージョンで演じたり、シェイクスピア劇を狂言に翻案して演じたりしたこともある。

「90歳でも現役として舞台上に立ち、『70歳くらいにしか見えない』と言われるように、いつまでも若い気持ちでいたいですね」

約700年間にわたり、営々と受け継がれてきた狂言の本質を守りながら、新しいことにも積極的に挑戦していくその姿勢は、きっと若い狂言師たちにも大きな刺激となっているに違いない。